

新郵送リストについて

前号でお伝えしましたように、この広報紙の郵送リストが改定されました。初めて『カナダ』を手にとられる方もおられると思いますが、カナダについて一層理解を深めていただきたいという趣旨の広報紙ですので、ご愛読をお願いします。

カナダを知る上でご参考になれば幸いです。本紙、郵送とも無料です。

郵送リストの改定に当たって、宛先をできるだけ個人ではなく、役職にしました。人事異動があつても、引き続き担当者にご届くよう、またご本人以外の多くの方々にも読んでいただけるようにするためです。

このようなリストを作る上で悩みの種は、住所や部署名がきちんと確認できないことです。また、間違つて二重、三重に送つたり、逆にリストから洩らしてしまふケースも考えられます。こうした場合は、ご面倒ですが、コード番号を明記の上、当広報部までご一報下さいませようお願いいたします。(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒東京都港区赤坂七丁目三十二八

カナダ大使館広報部

外交官になるつもりで経済、歴史、日本語を学んでいたが、ある日、雑誌で見たフランク・ロイド・ライトの作品に打たれ、建築家になる決心をした。直ちにマツギル大に移つてゴードン・ウエッパの下でデザインを勉強。ここで最優秀学生賞を得て、中東、欧州、スカンジナビアの建築を見て回つた。

この旅行で、エリクソンは、昔の建築家たちのオリジナリティと大胆さ、精神の内面をにじませた建築物の圧倒的な存在感をいやというほど味わつた。そしてこれこそ偉大な芸術の真髄だと彼は考えた。

帰国後、設計事務所を開くかわら、米国オレゴン大学やブリテイッシュ・コロンビア大学で教鞭をとる。

一九六一年、政府援助で日本、カンボジア、インドネシアへ。とくに日本では奈良、京都を中心に精力的に見て回り、西欧とは全く異質の文化に強い感銘を受ける。京都・西芳寺の茶室で天啓を得たというエピソードは有名である。

エリクソンの設計思想は、根底に人間解放の哲学を持っている。「私は建築物を見るとき、外観の美しさやデザインなどにとらわれない。私の関心は、どんな建物がその外観を超えられるのか、そして地域の人々の生活に影響をもちうるのか、という点にある。」

彼はいま、米国、欧州、中東、中国へと活動を広げている。西欧文明の限界を指摘し、各地の土着文化を生かそうとする彼の態度は、今後世界各地にどんな新しい建築を根づかせていくのだろうか。

年)や大阪万博(七〇年)のカナダ館、ブリテイッシュ・コロンビア大学付属民族学博物館、バンクーバー市の中心部ロブソン・スクエア、昨年オープンしたトロントのトムソン・ホール、オタワのバンク・オブ・カナダなどがあげられる。

彼が設計したロブソン・スクエア再開発計画は、米国建築家協会から賞を受けた。また、法廷内部を廊下から見ることでできるバンクーバー裁判所は、開かれた裁判所のイメージを打ち出した画期的な設計として評判になった。ブリテイッシュ・コロンビア大学付属民族学博物館も、「参加する」博物館として、異色である。

エリクソンは、一九二四年にバンクーバーで生まれ、二十歳までそこで過ごした。木と水の美しいBC州で育つたことは、エリクソンの感性に大きな影響を与えている。少年時代はスポーツが全く苦手で、詩と絵をかいて過ごした。カナダ画壇の革新派「グループ・オブ・セブン」の一人ロトレン・ハリスの家に入りびたりになっていたのも、この頃のことだ。



アーサー・エリクソン

油絵をかく一方、デザインにもとりつかれ、とくに建築スケッチに熱中して、空間、光、周囲との調和に関心を寄せた。

第二次大戦中、ブリテイッシュ・コロンビア大学在学中に、軍隊に入つて東南アジアに派遣される。戦後、大学へ戻り

カナダ建築界の第一人者

アーサー・エリクソン

バンクーバーから車で二十分ほど、なだらかなバーナビー山の林を登っていくと、突然、空が開け、低い落ち着いた建物が現われる。ギリシャのアクロポリスにもたとえられるこの建物は、エリク

ソンが二十年前に設計したサイモン・フレージャー大学である。低層の美しい校舎が、山頂の起伏に応じて波を打つように見え隠れし、それらを結ぶ遊歩道(モール)がまた美しい。サイモン・フレージャー大学は、一九六〇年代のキャンパス建築の最良のものとして話題になり、設計者エ

リクソンの名を世界に広めた。

アーサー・エリクソンは、個人の住宅や別荘から、オフィスビル、大学、博物館、国際博覧会のバビリオン、あるいは都市再開発に至るまで、どんな種類の建築にも全精力をつぎ込む、一種天才的な建築家である。彼の作品の中で特に有名なものとしては、サイモン・フレージャー大学のほか、モントリオール万博(六七

カナダ人物記⑧